
ザ・ハイ・スクール・カウンセラー・ライフ

神風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザ・ハイ・スクール・カウンセラー・ライフ

【コード】

N6681A

【作者名】

神風

【あらすじ】

現実社会に対する雄叫びです。ちょっと切ないですよ。ぜひご覧

下さい

はじめまして。

稲山って言います。

県立青山高校という学校でスクール・カウンセラーをやっているんですが、

こちらの学生達はみな誠実でいい子ばかりです。

なので滅多に俺の出番はないのですが…

今日はちょっと違っていました。

ある晴れた日の放課後、カウンセラー室

ガラ…

「あの…」

「あ、1・2の三上ちゃん？どうぞ、中に入って」

彼女は1・2の三上 葵ちゃん。作文コンクールで何度も表彰された有名人です。

「今日はどうしたの？」

「うん…。稲山さん、実は私みんなに隠し事してるの。ホントは隠し事なんてしたくないんだけど、このこと知ったらみんな私を嫌いになるだろうから…。でもいつバレるか恐くて仕方ないの」

「そうなんだ…」

以外だ。成績優秀で恵まれたお嬢様でもある彼女にも悩みがあるなんて…

「もしよかったら、俺にその隠し事を教えてくれないかな？」

「え?...あ、うん...でも...稲山さん」

「何？」

「教えても私のこと、嫌いにならないって約束してくれる？」

「ああ、嫌いにならないよ。誰だって隠したい事の二つや三つあるからね。もちろん、俺にも隠し事はあるし。そんなことで嫌いにはならないよ」

「ホントに？」

「もちろん、約束する」

「うん、わかった。じゃあ、言うね？」

さて、どんな隠し事なんだろうか？

こんなかわいい女の子の隠し事なんだから、かわいらしいものだと
思うけど。

「稲山さん、実は……」

とにかく、どんな隠し事でも受け止めてあげなければ……！

「私、実は……！」

さあ、かかって来い、隠し事！

「実は私、宇宙人なの……！」

三上ちゃん、それは反則だろ。

「しかもあの冥王星人なの!!!」

“あの”って…

その筋では有名なんだろうか。

「どうしよう、稲山さん！こんなことがみんなに知れたら、私はミステリーサークルを描いて農家の方々に迷惑をかける奴だって蔑まれてしまうわ！」

「あの、三上ちゃん？」

「私はミステリーサークルなんて描きません…あんなマネ、同じ宇宙人として恥ずかしいわ。それに人間をUFOでさらってチップを埋め込むなんて最低よ！」

「三上ちゃん落ち着いて」

飛ばしすぎだよ、三上ちゃん。

「えっと…三上ちゃんは宇宙人なの？」

「うん、そうなの。宇宙人なの。詳しく言えば冥王星人なの」

へー…ふーん…そーなんだ

「えっと…三上ちゃん。疑うわけじゃないんだけど、宇宙人っていう証拠はあるの？」

「あるよ…だって私は」

「？」

「だって私は“ペケペケ電波”を発せられるのだから!!」

OK、OK、

落ち着け、俺。

「う……う……私も最初は驚いたわ、自分が“ペケペケ電波”を扱えるなんて……」

「……三上ちゃん、“ペケペケ電波”って、何？」

「うん、“ペケペケ電波”はね、私達宇宙人だけが扱える特殊な電波なの。お花やウサギさんと会話ができるテレパシー電波なんだ」

なんかもう、異文化交流だよ。

「あ、稲山さん。実は私、もう一つ悩みがあって…」

「…何かな？」

「教育実習生の植山さんって人…私、あの人が恐いの…」

「なんで？優しくていい人でしょ？」

「だって…だってあの人」

「CIAエージェントなんですもの…！」

これが個性をのばす“ゆとり教育”の結果なのだろうか？

のばしすぎだよ、文部科学省。

「あの人私をエリア51に連れていくつもりだわ、あそこで私を解剖して“ペケペケ電波”の謎を解明するつもりなのよ！稲山さん…私、恐い…」

俺も恐いよ、三上ちゃん。

しかしどうするべきだろう？本人は自分を宇宙人だと本気で思っているようだし…

ペケペケ電波という言葉が出てくる時点である意味宇宙人なんだが、なにはともあれ、彼女がこのまま変な勘違いで苦しみ続けていくのは見たくない。

真実を伝えるべきだろう。

というかこっちの世界に連れ戻すべきだ。

「私堪えられない。自分の“ペケペケ電波”を悪用されるなんて…あれはウサギさん達と仲良くするための…」

「…三上ちゃん…！」

「え！？何？」

「落ち着いて聞いてね。三上ちゃん、君は、宇宙人なんかじゃないんだよ」

「…え？…アハハ、何言ってるの、稲山さん。だって私は“ペケペケ電波”を」

「三上ちゃん、“ペケペケ電波”なんてないんだよ…！」

「…嘘よ、だってウサギさん達と…」

「この町にウサギなんていないよ。全部キミの思い込みなんだ！」

「違うよ！ホントに会話できるもん、テレパシーだもん！」

「君は人間だ！普通の成績優秀な女の子だ！普通に生きるんだ！！」

「…なんでそんなこと言うの？パパやママや周りの友達だってそうよ…みんな私はいい子だって、成績優秀でいい大学に入って、いい会社に就職するんだって…」

「…三上ちゃん…？」

「私は…私は宇宙人だもん！冥王星人だもん！いい子なんかじゃないもん！！」

俺はその時、三上ちゃんの本当の隠し事がわかったような気がした。

三上ちゃんは絵に書いたような“いい子”だ。

コンクールに何度も入賞して成績優秀でおしとやかで上品で…

でもそれは彼女が作ったんじゃないと思う。きっと周りが押し付け

た“彼女”なんだろう。

それに三上ちゃんは苦しんだんだ。

いい子でいなければならぬ、期待に答えなければならぬ……

「違うもん……宇宙人だもん……いい子じゃないもん……」

だから自分を宇宙人にしたんじゃないだろうか。

そうやって自分を助ける為に……

確かにそれは現実逃避なだけかもしれない。

しかし、彼女にとって現実にはあまりにも重過ぎた。

彼女にとって宇宙人になることが、そんな現実には打ち勝つ唯一の方法なんじゃないだろうか？

だとしたら、彼女から宇宙人というものの取り上げて現実に突き落とすことが必ずしも正しいのだろうか？

「……三上ちゃん」

「……？」

「三上ちゃんは宇宙人だよ」

「え？」

「三上ちゃんは“ペケペケ電波”も使える筋金入りの宇宙人だよ、冥王星人だよ！」

「…うん、そうだよ！私は宇宙人なの！」

「そうとも、宇宙人さ！」

これでいい。現実と向き合う力はこれから少しづつ着けていけばいいんだ。

「ところで稲山さん！ちょっと質問していいかな？」

「ああいいよ！何だい？」

「稲山さんは何星人なの？」

「…はい？」

「だって普通の人には宇宙人なんて話、信じないでしょ？信じてくれるのは同じ宇宙人ぐらいだわ！で、稲山さんは何星人なの？教えて教えて！」

「…土星人…デス」

俺は優しい嘘をついたけど、

それと同時に大事な何かを捨ててしまった気がしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6681a/>

ザ・ハイ・スクール・カウンセラー・ライフ

2010年10月20日19時13分発行